OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<やさしさ>の中の居心地悪さ
Author(s)	田村, 公江
Citation	臨床哲学. 2000, 2, p. 83-89
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9904
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈やさしさ〉の中の
居心地悪さ

田村公江

序．臨床哲学の魅力と、「疑い深い女」の独り言
１．キーワード
1-1 「臨床哲学」とは
1-2 共時性、またはコ・プレザンス
1-3 非方法という方法
1-4 テクスチュア（きめ）
1-5 傷つきやすさ、ホスピタリティ
２．違和感のモトを求めて
2-1 間あいと自他の関係性
2-2 テクスチュア
３．人間の苦しみ

序．臨床哲学の魅力と、「疑い深い女」の独り言

人は誰でも苦しみの経験を持っている。だから著者の次のような考え方を拒否することは、誰であれ到底できないだろう。すなわち、苦しみにおいて「誰かが特定の個人として傍らにいて、何の条件も付けずに、苦しむ私の存在を受け止めてくれること、そして私のことばを聴きとり受け止め、私が自己理解するのを共にたどってくれること（本文からの要約）。」このように誰かが私と共にいてくれて、私のことばを聴きとってくれたなら、それは、どれほど素晴らしいことだろう。そのような素晴らしい贈り物を（もしくれるという人がいたら）拒絶することができるだろうか？

著者が提唱するような臨床哲学者を、私も友人の一人にぜひ持ちたい。そういう人が私の傍らにいてくれたら、どれほど力付けられるだろうか。そしてまた、私自身も臨床哲学の試みに出会うことによって、聴きとる耳を呼び覚まされ、やわらかな腐養土のごとき人間性へと陶冶されるのではあるまいか。ようするに、臨床哲学へと呼びかけられることによって、私たちは、力強い洞察力を内に秘めた、透徹したやさしさ

を身に付けることができるのではないかと思えてくる。著者の考えは、この世にやさしさがあることを信じさせ、人に希望を持たせるものである。その限りで、非の打ちどころがない。

けれども、私の中の「女」が疑い深くささやく。「哲学はこれまでしゃべりすぎてきた・・・・」と著者は言っているけれど、それって「(男性の) 哲学者はこれまでしゃべりすぎてきた・・・」ということなのではないの？と。あるいはまた、患者のセルフケアをケアするのがナースたち、そのナースの燃え尽きにまなざしを向けてセルフケアのケアのケアをしようとするのが臨床哲学だと著者は言っているけれど、そもそも燃え尽きが医師ではなくてナースに起こることを、なぜ問題にしないんだろう？と。

女たちはこれまで、「聞き上手」であること、男性を支え励まし苦労を共にすること、ようするに「いっしょにいて支えること」を、あまりにも当然のように求められてきた。女性が担ってきた支える営みを、素晴らしい文体で何か立派なものとして提唱してくれるのは、ありがたい。ありがたいけれども、美化されたおかげで、一方通行の要求にノンが言えなくなるのではないか。怨念話をしたくはないけれど、平等だよと言われて喜んでいたら、それは男並みに働かされる平等だったということもある。

今日私が試みるささやかな報告のタイトルは、もちろんフロイトの論文「文化への不満（Das Unbehagen in der Kultur, Malaise dans la civilisation)のもじりである。『「聴く」ことの力―臨床哲学試論』を読みながら、私は魅きつけられると同時に違和感を感じたのだが、違和感がどこから来るものなのか、まだよくわからない。違和感のモトを突き止めようと意地悪く点検しようと思ったのだが、文体があまりにも魅力に富んでいるので、つい、うっとりとだまされてしまう。今日は、なんとかして突き止めたい。

１．キーワード

1-1「臨床哲学」とは

まず臨床とは、「人の苦しみの場所」であり、臨床哲学とは、他者の苦しみの場所に、特定の個人として、そして同時に、哲学する者として、居合わせることである。ここで哲学する者として、と言われるのは、臨床哲学が治療の学であろうとするのではなく、苦しむ人と共に、その思考と対話を始めようとする、という試みだからである。著者は臨床哲学という営みの基礎に「聴くこと」を据えているが、「聞く」ではなく「聴

く」と表記している。これは、単なる情報としての言葉を聞くのではなく、ことばを受け取ることで相手の存在をも受け入れ、そのような受け入れによって相手の自己理解の場をひらくという、深い営みを示したいからであろう。

ここには著者が強調するように、あまりにも哲学者自身の主観に閉じ籠もった内省的反省に、哲学が衰退してしまったという現状認識がある。哲学の危機を、著者はこのように指摘している。たしかに、大学で哲学を教えつつ哲学「研究」している人々は、教室や研究室に閉じ籠もり、人と人との生（なま）の関係から言葉を紡ぎ出す力を失いつつあるかもしれない。著者は、「苦しみの場所」という人間存在の根源に、哲学者をもう一度立ち戻らせようとしているのであろう。

1-2共時性、またはコ・プレザンス

苦しみの場所に、共に居合わせることは、その時間を共にすることでもある。共時性というキーワードで著者が強調したいのは、客観的で冷静な観察者としてではなく、特定の個人として、他者の苦しみの場所に居合わせなければならないということであろう。苦しんでいる特定の人間の「いま・ここ」に、特定の人間として居合わせる。ミンコフスキーの「生きられた共時性」や「現実との生きた接触」という言葉が、効果的に引用されている。

1-3非方法という方法

アドルノのエッセイ論を引用して、著者は、体系的で一貫した論理を追求する「基礎付け病」的哲学とは違った思考活動を、提示しようとしている。たしかに哲学はこれまで、あまりにも体系的、論理一貫的、方法論的であろうとしてきた。そのようなオブセッションは、生きられた時間をかえってつかみそこねてしまうだろう。著者は、詩人の言葉にむしろ活路を見出そうとしているようだ。

1-4テクスチュア（きめ）

著者は、聴くことの力について考察を進めるうちに、ことばや声のテクスチュアに注目していく。ここで対照されているのは、ことばと言えばすぐに意味、意味と言えばすぐに整合的合理的な理解と、明晰さを求めて分析に分析を重ねていく発想である。著者はそのような分析的態度が、生きられた時間の表現から、かえって遠ざかっていくのではないかと考えている。ざらざらした、ひっかくような、すとんと落ちる・・・。

著者は実に豊富な語彙を駆使して、テクスチュアを描写する。その描写はまばゆいばかりだ。

1-5傷つきやすさ、ホスピタリティ

傷つきやすさ（可傷性）とは、「他者の苦痛に対する苦痛、他者の悲惨とその切迫を感じないでいることができないということ」（p.153 ）である。他者の苦しみに傷つかざるを得ないという感受性は、私たちに他者への責任をもたらす。この受動性こそがホスピタリティの核にある(p.154) 。ここには否応なく他者が迫ってくるという経験がある。そして私たちは自己同一性に閉じ籠もるのではなく、自分の同一性を抜け出ることによって、他者を受け入れることができる。ジャン・ジュネが女たちから迎え入れられ、お茶をごちそうになる話は、私たちが互いに自己同一性を脱ぎ捨てたところで歓待の時が可能となることを示している。

さて、これらは、苦しみの場所に共に居合わせるという臨床哲学的経験から発現してくる、素晴らしい美質である。しかしそれだけに、世の中にあふれている傷つきやすくない人やホスピタリティのない人が、なぜそうなのか、気になるところではあるのだが。

２．違和感のモトを求めて

著者は、どのキーワードも哲学的にしかも文学的に練り上げているので、著書を読めばよくわかるのだが、次の二つについては、哲学的に、もう少し説明を聞いてみたい。それは、「間あい」と「テクスチュア」である。というのも、「間あい」の方は、自己と他者の関係性の問題に、「テクスチュア」の方は、言語とは何かという問題に、つながっているからである。

2-1間あいと自他の関係性

私が私であること、私の自己同一性というものは、私一人で自己完結的に成立しているわけではなく、他者に補完されて成立している。補完性について著者はレインを引用している。「生徒のいない教師はいない。患者のいない医師や看護婦はいない。教師としての、あるいは医師、看護婦としての同一性は、たとえそれが一方的な関係であっても、やはり相互補完的ものである」(p.96)しかしまた、他者との相互補完性が正

常に作動して「他者の他者としてじぶんの存在を感じるためには、ある種の隔たりを介在させねばならない」(p.100)。この隔たりの介在は、人間関係においては言葉のやりとりにおける呼吸のようなものであり、著者はそれを「時間的なもの」、タイミング、間であるとして、木村敏を引用して説明している（p.87～）。

おそらく自他の関係性と間あいという主題は、この著書の中で、最も難解な部分であろう。自己と他者の間に介在するある種の「隔たり」を適切に保つことを、私たちは通常「間あいをとる」ことによって、やすやすと行っている。それに対して、分裂病の人は、間がとれず、出遅れたり、付け込まれたり、或いは間あいをとるために、へとへとになるまで相手の出方を考えたりする。この不思議な「間あい」というものは、何によって機能しているのだろうか？自他関係がそもそも相互補完的であるなら、間あいをとる働きはどこからやってくるのか？

また、著者はもともと、苦しむ場所に共に居合わせるという共時性を強調してきた。経験を共有する限りにおいては、私は他者と同じ時に居合わせるのである。しかしその私がひとたび他者とことばのやりとりをすると、そこには間あいが必要となる。ここで共時性の中に、出遅れたり先を越されたりという時間の前後が持ち込まれるのは、どういうことなのだろうか？ここには、自己同一性や話す主体の成立をめぐる時間の問題がある。

いっそこう考えてはどうだろうか。自己と他者の相互補完的関係によって自己が「他者の他者としての自分の存在を感じる」ことは、遡及的構成作業なのである。たとえ相互補完的関係がお互いの間で対称的に成立していたとしても、それぞれが自己同一性を感じる経験は、それぞれにおいて遡及的な構成作業なのである。しかし自己同一性を私たちは「常にあるもの」として拠り所としている。これはおそらく、実際には遡及的構成物なのだが、事後的に「はじめからあったもの」と錯認されているということなのだ・・・。そのような錯認のおかげで、私たちは「間がとれる」。

しかしこのように考えると、著者が大事にしていた共時性が、錯認のもとにあるということになってしまう。

2-2テクスチュア

著者は「ことば」というものに対して、微妙にアンビヴァレントなところがある。「噛みきれない論理」(p.21)こそ信用するという詩人の言葉に共感する著者は、「語りえないものを言語で表現する」という詩人の仕事に近接しようとしている。ここで著者が拒絶しているのは、体系的、論理一貫的、基礎付け主義的なことば使いなのであろう。著

者はそのようなオブセッショナルな哲学のことばに代えて、詩人のことばに活路を見出す。しかし、それはやはり、ことばの機能をあてにすることではないだろうか。詩のことばは、論理一貫的だが文脈固定的な貧しいことば使いと違って、一つの要素が幾つかの文脈を喚起するように作られている。比喩はことばの多義性を使いこなすところに成立するテクニックである。ということは、詩人こそ、言語の機能の達人なのだ。

しかし他方、著者は、「わたしたちが聴くときには、他人の声のきめをとおして他人に触れるのだと言った方がいい。ことばから〈意味〉というものが脱落したとき、そのときはじめてわたしたちは〈声〉を聴く。純粋に〈声〉に触れる。・・・私たちはいわば意味の外で声に触れるのだ。」(p.200) と言っている。著者は、声の身体性、声による身体の交わりを、根源的経験としているように思われる。ここには言語以前の存在享受経験が想定されているかのようだ。テクスチュアへの著者のこだわりは、むしろ身体性へのこだわりから来ているように思われる。

ここがわからない。ソシュール以来、分節以前の世界は、いわば「物自体」のような扱いになっているのではないだろうか？幼児期に私たちは「物自体」の世界の住人だったかもしれない。しかしそれは失われている（フロイトが言うように、幼児期はそのものとしてはもはやない)。言語以前の存在享受経験を、言語の住人となっている私たちは、再体験できるのだろうか。ひょっとしてそれは、そのような「いわくいいがたいもの」があるという幻想なのではなかろうか？

３．人間の苦しみ

ここまでたどってきて、少し、違和感のモトが垣間見えてきた。それは、人間の苦しみというものを、そもそもどのようなものとして捉えているかということである。もちろん、死、喪失、病気・・・とこの世に苦しみの種は尽きない。しかし問題は、それを経験する主体にとって、それが何なのかということである。苦しみに意味がないということをどうするのか、生きる理由が見出せないことをどうするのか、と著者は問いを深めていく。ここには、精神分析がたどりついたのと同じ問題がある。私の存在の意味を私は解き明かさなければならないという、いわゆる自己言及の苦闘である。

そしておそらく、ここに、著者の態度決定がある。そして私の違和感のモトがある。

著者は、他者が「存在を無条件に肯定する」という贈り物を、することができると言う（p.252)。私たちが幼児期に受けた世話は、単なる生理的世話ではなく、「他者の

存在をそっくりそのまま受容してなされる『存在の世話』とでもいうべき行為」であって、もしだれかが不幸にして幼児期にその経験ができなかったとしても、他者がそれを「花束を差し出すようにして」贈ることができると言うのである。この考え方は、希望を与えるという意味で優れたものだが、たとえば分裂病の人の場合にも、有効だろうか。精神分析においては、自己言及の苦闘をあまりにも厳密に行わなければならないところが、分裂病の病理であると考えられている。また一般に、私たちが苦しみをくぐり抜ける時に他者の存在が助けになるとしたら、それは「存在を無条件に肯定する」贈り物によるのではなく、やはり、ことばの機能によるのではないだろうか。

もしかしたら、存在の受け入れがあってこそことばの機能は生きてくる、ことばの機能が生きているところでこそ存在の受け入れがあるという、一種の循環になっているのだろうか。著者に違和感をぶつけようと企んでいたはずなのだが、著者の術中にいつのまにか抱き取られているようだ。臨床哲学の試みに誘惑されたところで、報告を終わりたいと思う。